



國學院らしい教養をもとめて



— 教養総合科目の改編と「國學院科目」「教養総合演習」 —

國學院大學では、全学共通の教養科目「教養総合科目」を改編し、平成26年度から新しいカリキュラム編成のもとで授業を運営しはじめました。今回の改編では、新たに本学教養教育の編成・実施方針を明確化したうえで、グローバル化する社会に対応しつつ、本学の建学の精神に基づいた教養教育の展開が目指されています。また、日本の文化的伝統や現代の問題について、体験やフィールドスタディーを交えながら考えて行く「國學院科目」や、学生自らが学びの主人公として主体的に学び、批判的思考力、ディスカッションやプレゼンテーション能力など、大学での学びはもとより、社会生活で必須となるスキルを磨く「教養総合演習」という新たな科目群が新設されたのも大きな特色のひとつといえましょう。学生の皆さんに、新しい、本学ならではの教養教育を楽しんでいただければと思います。



教育開発推進機構
共通教育センター長
柴崎 和夫

改訂された教養総合カリキュラム

教養総合カリキュラムは、國學院大學の学士課程教育プログラムのなかで、各学部が責任を持つ専門教育と並ぶ2本の柱の1本です。基本的に全学部の学生に共通して提供されるカリキュラムと言うことで、共通教育カリキュラムとも称しています。

さて、現行の教養総合カリキュラムは、平成7年(1995年)にそれ以前の一般教育(一般教養)の全面的な見直しが行われ、その結果成立したカリキュラムが原型です。平成21年(2009年)には、「グローバル化の進展による均質化と、文化の多様性・複雑性が併存する世界で生きるため」として、「人間総合科目群」という新たな枠組みを設定し、テーマ別講義科目の再編を軸とした見直しを行いました。見直しから4年を経て、近年は高度の専門性が求められる『知識基盤社会』の中で活躍する人材の育成や、グローバル化に対応する人材の育成を、大学が社会から強く求められるようになって来ました。

グローバル化に対応する人材育成というと、すぐに外国語(特に英語)教育の強化が筆頭にあげられますが、他方で自分の生活基盤となっている地域・国に対する自覚の確立を求める大切さも強調されています。これは、日本語や日本文化に対するしっかりした知識・理解を身につけることが、ますます重要であることを意味しています。

もう一つ重要な観点は、日本社会の少子化の進行で18歳人口の著しい減少が引き起こす、大学間競争の激化です。大学には、大学教育の「質保証」が求められると同時に、建学の精神を反映した「個性ある教育」の遂行も要請されています。教育の「質保証」でいえば、いわゆる3ポリシー(「学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)」、「カリキュラム編成方針(カリキュラム・ポリシー)」、「入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)」)の制定と、それらに基づいた教育および「内部質保証」体制の構築は当たり前のことと考えられています。國學院大學でも各学部・学科で3ポリシーを制定しました。しかしながら、主体が各学部・学科であるということは、専門教育に関してのポリシーだということです。

これに対し、教養総合カリキュラムは全学共通(学部横断的)に提供されるものであり、『ディプロマポリシー』を定めることが難しい、というよりも、学位を授与しているわけでないので基本的に決定できないと言うことです。しかしながら、國學院大學として学生に提供する教養総合カリキュラムであるから、『國學院大學らしさ』を持ったカリキュラムとして、その意図を明確にしておく必要があると考えました。つまりは、教養総合カリキュ

ラムが目指す人材育成の目的・目標をあきらかにし、いわゆる「カリキュラム・ポリシー」に相当する方針をしっかりと定めることが大事だと考えました。

以上のことが、今回の教養総合カリキュラム見直しの経緯であり、目的でもあります。「國學院らしさ」とは何かにこだわり、「建学の精神」を改めて考え直してみました。その詳細は以下で示します。ただ、今回の改訂のなかで是非とも実現したかったことを一つ述べておきます。それは、個人的な思い入れが強いことは承知ですが、「体験する」ことを重要なキーワードとして取り入れる事でした。少し大げさですが「知行合一」が大切であることを言いたかったのです。「知行合一」のそもそもの意味とは少しずれますが、頭でっかちで知識のみ仕入れるのではなく、自ら実践もすることで学ぶ、ということ、教養総合カリキュラムで保証したいとの思いがありました。

今回の教養総合カリキュラムの改訂が本当にその目的を達成できるかは、実際の様々な科目を担当する教員の力量、あるいは教養総合カリキュラムの中での自分の科目の立ち位置をしっかりと理解して授業を実施しているかどうか、などに大きく関わります。そしてそれは、どれだけ今回の教養総合カリキュラム改訂の意図を正確に伝え、理解してもらい、実践してもらえるかにも関わっている、と考えています。

今回のこのレターの記事が、多くの教職員に読まれ、理解してもらえることを期待しています。

本学教養総合科目の「カリキュラムポリシー」に準じた人材育成上の目的

—建学の精神をふまえて個性ある教育を展開することをめざす—

学則より

第1条 本学は神道精神*に基づき人格を陶冶し、諸学の理論並びに応用を攻究教授し、有用な人材を育成することを目的とする。

*主体性を保持した寛容性と謙虚さの精神

有栖川宮熈仁親王による告諭、ならびに上記の学則第一条に述べられていることに基づく國學院大學の人材育成の目的を現代に即して捉えなおせば、日本人としての主体性を保持しつつ多様性を認めて謙虚に学ぶこと、人

間性を高めて人生の本分を尽くすこと、諸学の基を極めつつ基礎的な理論と応用力を身につけることをめざしているといえます。

このような人材育成の目的に対し、これからの教養総合カリキュラムが果たすべき役割は、1) 神道精神についての学び、2) 人格を陶冶するための学び、3) 学問の基を究めるための学び、4) 諸学と諸外国の良い点の学び、を提供することにあります。これによって、地域や社会の多様性、人生や価値観の多様性、学問や思想の多様性を認知するとともに、自らの拠って立つ基盤である日本の歴史、伝統、文化を相対的に理解して自分自身を肯定的に認め、未来社会の変動に対しても、時代に流されることなく、自己の本分を尽くして生きてゆくための力を身につけることを目的とします。

目的を実現するための科目構成及び到達目標

上記の人材育成上の目的を実現するために、教養総合カリキュラムの構成を表1「教養総合カリキュラムの構成」のとおりとし、教養総合カリキュラム全体の到達目標として、以下の6項目を設定します。

- ①日本の伝統と文化(歴史を含む)を理解し、説明できる。
- ②文化の基盤としての国語(日本語)を知り、操ることができる
- ③一言語以上の外国語を習得し、言語を含む外国文化を理解することができる。
- ④多角的、複眼的な視点で物事を捉え、考えることができる。
- ⑤自ら疑問を発し、調査・研究する意欲や態度をもつ。
- ⑥多様性を認め、他者を理解することができる。

これらの目標と教養総合カリキュラムを構成する授業科目との関連については、基礎科目群のうち「神道科目」、「國學院科目」は主に①に関連し、「言語科目」は②と③の目標達成を目指す科目群です。人間総合科目群は主に、④、⑤、⑥の目標達成を目指す科目群と位置づけることができます。上で示した「カリキュラムポリシーに準じた人材育成上の目的」で述べた教養総合の役割の観点からは主に、1)に関連するのが①と②、2)は①から⑥すべてに通じ、3)に関しては④と⑤、4)に関しては

③から⑥の目標となります。

表1「教養総合カリキュラムの構成及び到達目標」

教養総合カリキュラムの構成		関連する到達目標	
教養総合科目	基礎科目群	神道科目	①
		國學院科目	①
		日本語科目	②
		必修・選択必修外国語科目	③
		スポーツ・身体文化科目	① ⑤
	人間総合科目群	テーマ別講義科目	④ ⑥
		総合講座科目	④
		教養総合演習科目	⑤
		情報処理科目	-
		キャリア形成支援科目	④ ⑥
		選択外国語科目	③
		Japan Studies	-
		留学生科目	-
		単位認定科目	-

國學院らしい教養と学びのスタイルを学生たちに!

—「國學院科目」「教養総合演習」の新設—

今回の教養総合科目の改定では、先に示した教養総合科目の「カリキュラムポリシーに準じた人材育成上の目的」の制定のほかに、テーマ別講義や外国語科目など、既存の科目群の再編成が行われました。しかし、今回の改定の目玉といえるのが、本学ならではの教養教育を行うことを目的とする「國學院科目」と、アクティブラーニング(能動的学習)によって学生が自発的、主体的に学修することができる授業群「教養総合演習」の新設です。

日本文化を考え、発信できる力を養う!—「國學院科目」

グローバル化が進む現在、多くの日本の大学では、「グローバル人材」の育成を目指して英語力の強化や海外留学の促進を図っています。もちろん本学においてもランゲージ・ラーニング・センター(LLC)を新たに設置するなど、学生の外国語能力のさらなる向上を図るため、様々な努力が行われています。しかし、グローバル化への対応とは、単に外国語に堪能で、海外で働く能力を持つ人材を育てればよいのでしょうか? 國學院大学では、

こうした時代だからこそ、本学が創立以来育んできた日本文化に関する教育を、より一層進めてゆきたいと考えています。なぜならば、グローバル化が進む時代だからこそ、その波に押し流されず、日本人としての主体性を保持して世界で活躍できる人材を育てなければならないと考えるからです。そして、自文化への理解と誇りを持つ人こそが、他の国や地域の文化に対する尊重と寛容の念を持つことができるはずです。日本文化を学ぶことを通じて、真にグローバル化社会の中で活躍できる人材を育てたい、そうした思いから、本学では平成26年度か

ら日本文化を学ぶ科目群「國學院科目」を開設しました。

「國學院科目」とは、本学のミッションである「伝統と創造の調和」「個性と共生の調和」「地域性と国際性の調和」に基づいた、特色ある教養教育を推進するために設けられた科目群です。具体的には、日本の伝統文化や自然、さらには日本社会が直面している様々な課題を学ぶことを通じて、本学の建学の精神である「本ヲ立ル」即ち、日本とは何か、日本文化とは何か？を考え、自らと社会に問いかけてゆける人物を育てようとするものです。また、この科目群では、講義だけではなく、「雅楽」

や「書道」、「礼法」や「茶道」など、実技・実習やフィールドスタディーを交えた授業も多数設けられるのも特色のひとつです。つまり、日本の伝統文化を単に知識としてだけではなく、実際に「体験」を交えながら知ることが求められています。もちろん、これは単に体験そのものを重視するものではありません。むしろ、



小野先生 月曜6限 雅楽入門



橋本先生 火曜6限 書道入門

國學院科目、26年度・27年度開講予定 (27年度開講科目の名称は変更することがあります)

國學院科目	26年度開講科目	27年度開講予定科目
日本の基層文化…神道を中核とする日本の伝統文化や精神、そして歴史への理解を深めることを目的としています。	「現代日本社会の「神道」 「女性祭祀の伝統」 「祭りに潜む世界を探る」 「民俗宗教論」 「神道と日本人の信仰」 「日本の伝統文化と現代社会」	「日本の霊山と精神文化」
國學院の学問…國學院大學が培ってきた学問的な伝統や、現在大学で行われている学際的な研究の成果を直接学生が学ぶことができる授業が開かれています。	—	「國學院大學の歴史と未来」 「渋谷学」 「共存学」 「フィールドスタディ」
和の心・技・体…日本の文化的伝統について深く理解するとともに、そこにみられる精神と、代表的な伝統文化・芸能を、体験を織り交ぜて学ぶことを目的としています。	「雅楽入門」	「茶道入門」 「将棋と日本文化」 「礼法」
ことのはの文化…本学は132年間にわたり歌人や作家、そして高い国語能力を持つ教員を社会に輩出してきました。その伝統を継承し、古典を基礎とした国語能力をみがき、ことばや書をつうじて豊かに表現することができるようになる授業が設けられています。	「書道入門」	「和歌をまなぶ」 「和歌を詠む」

※他に歌舞伎や能などの伝統芸能や相撲、有職故実などの授業の開設も検討されています。

講義と体験を織り交ぜることにより、日本文化に対する、学生の主体的な学習意欲を一層引き出すことを目的としています。

まだまだ始まったばかりの「國學院科目」ですが、今後平成28年度までに随時科目内容を充実させ、本学ならではの教養プログラムとして成長させてゆきたいと考えています。

自ら課題を見つけ、探求し、表現する学生を育てる—「教養総合演習」スタート！

「大学の授業」というと、大きな教室で教員が講義を行っている光景を思い浮かべる方も多いでしょう。しかし、こうした講義型授業では、学生はともすれば単に授業を聞くだけの「受動的な学修」に終始してしまうことがあります。一方、高等教育界においては、授業の効果を引き出し、知識を定着させるためには、学生が自ら調べ、考え、それをグループディスカッションや発表などで表現してゆくほうが、より高い学習効果が得られるとされてきました。

近年、日本の大学では、こうした「受動的な学修」から「能動的な学修」へ、学修の質の転換が図られています。学生に自ら学び、思考し、課題を発見し、問題を解決してゆく能力を身につけさせることにより、より学修の質を向上させるとともに、社会人としての基礎力を鍛え、世に送り出してゆくことが目指されています。そのため、こうした能力を鍛えあげる授業、即ち「アクティブラーニング」(能動的学修) 授業が注目され、広く各大学で行われるようになってきています。アクティブラーニング授業の多くは、主に各学部における専門課程で展開されるのが一般的ですが、本学では、専門科目のみな

26年度開講科目

「口頭による自己表現の技術」	(後期)
「政治のみかた」	(後期)
「中・東欧の歴史と社会」	(前期)
「学び合うスポーツと武道」	(前期・後期)
「学生主体型授業の冒険」	(後期)

※27年度にはクリティカル・シンキングやコミュニケーションスキルを鍛える授業、さらには学生が自ら課題を発見し、探求したりグループで問題解決に当たる授業を数科目新設することを予定しています。

らず、教養教育においてもこれを展開することを目指し、26年度からアクティブラーニング主体の授業群「教養総合演習」を開講することとしました。

教養総合演習の目的は、第一に、学生に主体的・能動的な学修を通じて学ぶ楽しみを知ってもらうとともに、課題探求力、考え抜く力、プレゼンテーション能力やコミュニケーションスキルを伸ばさせることにあります。そのため、各授業は原則的にアクティブラーニング型の授業として運営されます。そして、第二の目的として、専門教育と連携した教養教育の構築を目指します。現在本学では全学部で初年次教育を実施し、その中で課題について調べ、発表する作業を課しています。そうした初年次教育で習得した学修スキルに磨きをかける機会として教養総合演習の各授業を履修することで、2年次後半以降に始まる各学部のゼミ教育に結び付けることが可能になります。つまり、教養教育と専門教育を密接に連動させることを通じて、主体的に学び、考え、それを表現できる学生を育成することが目指されているのです。加えて、こうした能力は、大学での学びの基礎となると

ともに、教職就職活動や、さらには社会で活躍する基礎能力ともなるものです。現在はまだ開講数は少ないものの、漸次講義数を充実させてゆこうと考えています。もっとも学生らしい学びを楽しめ、かつ、社会で必要なスキルを身につけることができる「教養総合演習」、是非とも受講し、アクティブな学びを存分に満喫してください。



藤嶋先生 木曜3限 教養総合演習
(中・東欧の歴史と社会)



阿部先生 火曜2限 教養総合演習
(学び合うスポーツと武道)